

～季節だより～

シモバシラの氷花

「シモバシラ」と聞けば、多くの方が、かつて冬の未舗装の道路や野山で踏んだことのある「霜柱」を思い浮かべるのでしょうか。これも、寒さがもたらす現象には違いありませんが、今回取り上げた「シモバシラ」とは、シソ科の植物の名前なのです。そして、「氷花」とは、初冬から地中水分が凍結するまでの間、その植物が削り出す氷の造形なのです。

……ある初冬の朝、枯れたこの植物の茎の中を毛細管現象により地中から上がってきた水分は、初めてマイナスの気温となった大気の影響を受け凍ります。ご承知のように、水は凍ることにより体積が膨張します。茎は、その中で膨れた氷の圧力により、もっとも弱い部分で裂けます。その日の出来事は、多分これまでなのでしょう。

そして、翌朝。と言っても条件が整った朝、再び地中から上がってきた水分は、前日にできた裂け目から大気中に顔を出します。そして、零下の大気に触れて瞬時に凍ります。地中からの水分の補給が続けば、半透明の氷花は白い横筋を文様として付けながら、少しずつ巻き込むような形で育っていきます。……

シモバシラの氷花はこのようにしてできあがるのではないのでしょうか。

ご承知のように、シソ科植物の茎の断面は円形ではなく四角形です。この「茎が四角い」ということが、この現象を引き起こす原因となっているのでしょう。四角い茎は、折れることに対しては強いのですが、四角形ゆえに作られる稜（角）は、内側からの圧力に対して弱いものです。ですから、水分の凍結による内側からの圧力に抗しきれず、まず稜の部分から裂けてしまうのでしょう。

キク科のカシワバハグマのように、茎の断面が円形の植物にも現れることがあるようですから、茎が四角形であることは必ずしも必要条件ではないようです。しかし、茎が円形植物の場合、水分の凍結による茎の裂け方が、この現象を引き起こしやすい形になった場合に限定されるのではないのでしょうか。

シモバシラと同じシソ科のカメバヒキオコシという植物で同じ現象が見られます。多摩川流域では、このカメバヒキオコシがよく見られます。

この植物は、少し湿り気のある土地を好むようですので、この冬、朝早く奥多摩の山を歩く機会があれば、探してみたいかがでしょうか。

～ 来 ま つ せ え ～

海沢のカタクリと史跡探訪

行 先：白丸～海沢

開催日：3月23日(月)、4月3日(火)

青梅線も終点近く、鳩ノ巣駅を過ぎ、トンネルを抜けていくと、車窓にエメラルドグリーンの水をたたえた白丸湖や数馬峡橋が見えてきて、山あいの静かな白丸駅に着きます。

今回は、この白丸駅がスタート地点です。

白丸は、今年没後50年を迎える、近代日本画壇の巨匠、川合玉堂画伯(1873～1957)が、戦時中、昭和19年12月から約1年間、疎開されていたところです。白丸の自然や疎開生活が、たくさんの和歌や俳句(白丸雑稿)に残されています。

白丸駅から川合玉堂の足跡をたどりながら、石畳の道、本栖神社、さらに「名に負える天地嶽はも人知らず 奥多摩槍といはば知らまく」と詠まれた天地山を展望し、石畳の道を下っていきます。

また、白丸地区は、昔から交通の難所で、尾根が多摩川にせまり、氷川以奥の村々は根岩(ねえや)越えとって、ゴンザス尾根の険しい山道を越えなければ行き来が出来ないところでした。

元禄年間に、硬いチャートの岩を打ち砕き、人馬の通える「数馬の切通し」が出来ました。この開通によって、生活、文化に大きな変革をもたらしました。

「数馬の切通し」の岩の道に立つと、道具の少なかった時代、先人の道づくりへのたゆまぬ工夫と努力に感動を覚えます。

後半は、数馬峡橋を渡り、遊歩道を通って海沢(うなざわ)地区に出ます。

海沢には、木村さんご夫妻が、ご自分の土地に、永年丹精をこめて、大切に守り育ててきた、春を告げる可憐な花、カタクリの群落があります。斜面に散策路も設けられていて、アズマイチゲの花と共に見学させていただきましょう。発電用調整池、大加林道を経て、奥多摩駅に向かいます。

今は冬の真っ直中ですが、毎日に日脚が伸びて、梅が咲き、鶯の鳴き声が奥多摩の溪に聞こえ始めると、待ちに待った春の到来です。

春を楽しみにしてお出かけください。



～ 行 っ て き た あ よ ～

雲取登山教室を終えて

今回は10月12日～13日の「雲取登山教室」の結果を報告します。参加者は2度の試行登山を経て合格した22名(当初50名)と関係者、ガイドの35名でした。8時10分、臨時バスで鴨沢登山口へ、簡単な挨拶、コース概要、諸注意の後、急入りに準備運動を行いました。「さぁ」これから雲取山に挑戦です。秋晴れの絶好の登山日和です。

9時20分、登山口を出発。身体が慣れるまでゆっくり登り、12時、「堂所」に到達、昼食。12時40分出発、途中石尾根から見える富士山を中心とする山々の展望のすばらしさ。少し色づいた落葉樹の木の葉が我々の目を楽しませてくれます。時折、額の汗をそよ風が撫でる心地よさ。又今年はいつになく「クマ棚」が多く見受けられました。

15時、小雲取山を通過してから雲取山荘まで、苔むした原生林の巻き道を歩く間、3ヶ所で計7頭のシカに出会い、又神秘的なヒカリゴケを見る

事が出来、参加者全員感動また感動でした。16時30分、雲取山荘に到着。

夕食を済ませてから、山荘のご主人新井さんの「クマの話」を聞きました。そして外に出てみると澄んだ夜空には、都会では観る事の出来ない満天の星。そこに一筋の流れ星、実にロマンチック。21時、明日の天気を祈りつつ就寝。

翌13日は、絶好の登山日和。5時半起床。山荘より日の出を拝む。朝食後、しっかりと準備運動をした後、7時10分、雲取山頂を目指し山荘を出発。7時40分、雲取山頂到達。富士山を含め四方の山々の眺望は値千金。参加者の感動は如何ばかりだった事でしょう。

5月から始まって苦しくも楽しくもあった登山教室は、寂しく悲しいけれど、今日で終了。親しくなった皆さんともお別れです。私たちガイドは、今回の教室での体験を活かし、皆さんが、楽しく安全に登山をしてくれる事を願っています。

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その2～

雷 撃 死

今年の春先は、全国で山岳遭難が相次ぎ、マスコミを賑わわした。谷川岳でも八ヶ岳でも、北アルプスでも、雪崩や転落、凍死などで、多くの死者を出した。例年より残雪が多く、気象の変化が激しかったから、急変する春山の天候に対応ができなかったものだろう。それにしても相変わらず中高年遭難の多いことが痛ましい。

4月25日、奥多摩は朝のうち爽やかな日差しがあったのだが、午前10時過ぎから突如雨が降りだし、稲妻が光り雷雨となった。バケツをひっくり返したと表現するような大雨である。傾斜のある奥多摩交番前の道路を、雨水が川のように流れて流れた。しかしそれも長くは続かず、30分もすると雨は止んだ。寒冷前線が通過してしまっただろう。

午前10時40分ころ、山スキーガイドの雨宮節さんから、山岳救助隊本部の奥多摩交番にいた私の所に電話が入った。雨宮さんはヒマラヤ黄金時代といわれた初登頂争いが終わって、より困難な尾根や壁から頂上にアタックするヒマラヤ鉄の時代になって活躍した登山家である。バリエーションルートから、マナスル、ダウラギリ本峰、サウスピラー、アンナプルナなどに「イエティ同人」隊長として挑み、「山岳同志会」の故小西政継さんなどとヒマラヤ鉄の時代に足跡を残した。そして還暦を過ぎてもチョ・オユー、エベレストなどの8000メートル峰に挑戦し続けている。

私とは、雨宮さんが「山幸」という登山用品の店をやっていた20数年前から、親しくお付き合いさせてもらっている。

その雨宮さんから突然の電話は遭難事故の連絡であった。「いま雲稜会のKが、本仁田山で雷にやられた、こちらからも向かうが山岳救助隊にすぐ出動してもらいたい」というものだった。場所は安寺沢から登る大休場尾根で、1時間ほど登ったところだという。雨宮さんと電話で話しているときに、通信司令本部からも山岳事故発生の指令が入った。私は雨宮さんに「いまからすぐに出動します」と言って電話を切り、山岳救助隊の召集をかけた。

私も雲稜会のKさん(66歳)とは5年ほど前、「東京雲稜会」創立50周年記念パーティでお会いしたことがある。

通信司令本部から聞き取った通報者の携帯電話番号をブッシュした。男性が電話に出た。様子を聞いたところ、通報者は遭難者の同行者ではなく、たまたま近くにいた男性登山者であった。私は「雷に何人やられています」と聞いたところ「男性と女性の二人が倒れています」と言う。「意識はありますか」と聞くと「男性は呼吸していま

せんが、女性は足をやられているだけで意識はあります」と言う。私は「人工呼吸はできますか」と通報者に聞くと、「できません」と言った。私は「すぐ向かいますから心臓マッサージを続けてください」と言って電話を切った。

私は山支度をしながら、今日は週末で近くの白妙橋岩場でフリークライミングをやっている、W隊員とS隊員に電話を掛け、すぐ遭難現場に向かうよう指示した。

本仁田山はどこから登っても急な山だ。北側の大ダツ周辺は、増えすぎたシカの食害が進み、山肌が砂漠化する現象が激しいため、町は安寺沢から大ダツまで、荷物および人員搬送用のモノレールを架け、シカ被害防護に乗り出した。

そのモノレール運転者講習会が今日、安寺沢で行われており、山岳救助隊員の1小隊長なども参加しているはずである。そのモノレールが使えれば遭難者の搬送は容易だ。

午前11時05分、私は集まった者だけで出発した。安寺沢には消防の救助隊が先着していた。モノレールは2台あるが1台に5名しか乗れない。スピードも人が歩く速さか、むしろ遅いくらいだ。ただ使用したのとはしないのでは到着してからの体力消耗度が違う。

「よし行くぞ」私はS隊員に運転させモノレールの先頭車両に乗り込んだ。消防の救助隊も乗り、乗れない者は徒歩で大休場尾根を登りはじめた。

途中体が冷えてきたと思ったら、山肌の所々に白く見えるのは、大豆ほどの雪が残っているものであった。下は大雨であったが、この辺りでは激しい降雪があったものだろう。上空はガスっており、ヘリは無理だろうから、このモノレールで降ろすことになるだろう。

約30分ほど登り、モノレールが尾根に最も近づいた辺りで見当をつけて私はモノレールから飛び降り、尾根に這い上がった。「おおーい」と声を掛けると、尾根の下の方から「おおーい」「おおーい」と何人かの応答があった。

現場より少し登り過ぎたらしい。モノレールを止めさせ、私は大休場尾根に登り上げ、登山道を少し下った。徒歩部隊が早く着いたらしい。100メートルほど下るとN隊員の姿が見えた。「現場はそこか」と声を掛けると、「ここが現場です」との答えが返ってきた。

現場には、被雷したKさんがシートを掛けられ横たわり、消防の救助隊員が心臓マッサージを施していた。「どんな具合だ」と聞くと「心肺停止状態です」という。傍に蹲って震えている女性がいる。同行者のTさん(52歳)であった。Tさんは足が痛いといっているが、意識はしっかりしているという。近くにいた隊員に保温しておくように言って、一刻も早く降ろす算段を考える。

大勢の後続隊員も到着した。W隊員が「登山道を50メートルほど下ったところのすぐ下にモノレールの線路が通っている」と言う。私も確認に下ってみた。ここまで降ろせばモノレールに乗せることは容易だ。ここまで降ろそうと再度現場に戻ると、消防のヘリが立川の航空隊基地を飛び立ち、いまこちらに向かっているという。

ヘリの方が早い。この尾根上は立ち木は多いが大木はない。吊り上げるにしゃまな木を何本か切れれば、ここからヘリにピックアップ可能だろう。みんなで吊り上げ場所の整備に取り掛かる。10分もしないうちヘリの爆音が聞こえてきた。発煙筒を焚き場所を知らせる。

ヘリは真上でホバリングし、担架を持った航空隊員が降下してきた。先ず重傷のKさんを担架に移し替え、大型ヘリの風圧の中、下で誘導ロープを操作し、午後0時35分、Kさんをピックアップし立川の災害医療センターに搬送した。30分ほどして再びヘリが飛来、同行者のTさんもピックアップされ、同じ病院に搬送された。

ヘリを使った最も安全で、素早い救出ができた。あとはKさんが何とか蘇生してくれることを祈るばかりだ。

遅れて本署の刑事課員が登って来て、実況見分が行なわれた。大休場尾根は、氷川から本仁田山(1225M)に直接突き上げる急な尾根である。現場は標高920メートル付近で、所々に岩が露出した場所もある。巨樹と言われるほどの大きな木はないが、尾根の右斜面は杉の植林帯であり、左斜面および尾根上はコナラなどの雑木が覆っている。

現場付近の樹木には焦げた跡や引き裂かれた跡などないことから、人体に直接落雷したものと思われた。しかしKさんが着ていた衣服にも、被雷した写真などで見るような焼け焦げた跡やボロボロに破れた跡なども見当たらなかった。

見分が終わって、午後2時50分、安寺沢に全員下山した。

奥多摩交番に本署の刑事課から連絡が入り、病院に運ばれたKさんは医師により午後2時20分、死亡確認がなされ、死因は「雷撃死」だという。一緒にいたTさんも、側撃により火傷を負ったが命には別状がなく、一週間ほどの入院となったという。

午後3時を過ぎて、奥多摩交番に雨宮さんが東京雲稜会の代表も務めた穂刈さんと、Kさんの奥さんを伴って到着した。残念ながらKさんは亡くなられたことを報告すると、三人は一様に肩を落としたが、Kさんの奥さんは丁寧に救助活動に対する礼を述べられた。私は遭難現場に到着した時のKさんの状況、ヘリにピックアップし二人とも立川の災害医療センターに運んだこと、医師によりKさんの死亡確認がなされたことなどを三人に説明した。

Kさんの奥さんにとって、突然の夫の死は衝撃以外の

なにものでもないはずなのに、取り乱すこともなく、携帯電話で知人に連絡をとっていた。登山家の妻であれば「いつかはこのような事もあるかもしれない」という覚悟があったものだろうか。

私が奥多摩に来て、落雷による遭難事故は初めてである。以前に長沢背稜の樹林帯で事故があったと聞いたことはある。落雷事故は、北アルプスなどの岩山ばかりではなく、雷雲が発生すればどこでもその危険があるということだ。

この雷は、寒冷前線の通過に伴って発生する界雷と呼ばれるものであろう。上空に寒気が入って、大気の状態が不安定になったために積乱雲が発達し、雲の中では激しい上昇気流が起こり電気が発生、そして降雷、落雷となったものと思われる。

当日、天気予報では「関東地方を寒冷前線が通過するから、各地で雷をともなった強い雨が降る」と報じていた。事東西多摩地区一帯で強い雷雨があり、八王子などでは直径5ミリほどの雷が叩きつけるように降り、見頃を迎えたサツキなどが、うっすら、白く化粧したという。

Kさんは、最初の一発でやられたという。雨が降りだしたので同行者のTさんが荷物を降ろして合羽を用意していたとき、傍に立っていたKさんに落ちたという。そして間近にいたTさんも側撃を受けて倒れた。

人間の体は、約60~70パーセントは電気を通しやすい水分でできている。尾根上には樹木もあったのだが、立っていたKさん自らが避雷針の役割をしてしまったものだろう。

亡くなったKさんは、伝統ある東京雲稜会の卓越したクライマーであった。昭和41年には都岳連隊の一員として、マナスルの頂上にも立った。また雨宮さん達とダウラギリ1峰にバリエーションルートから挑戦したり、還暦を過ぎてからもチョモランマに挑戦するなど、常に前向きに山に情熱を賭けてきた登山家であった。

この遭難のすぐ後に発行された登山誌「G山想」に、Kさんの「中年のチョモランマ挑戦記」が載っていた。それには「遠征というものは同年代で気心の知れたメンバーで行かなければ楽しくはないし、中年にとっては登山そのものが無理だということがよく分かった。(中略)中年には、それに合ったタクティクスを組むことが不可欠であると思った。そんな遠征隊が組めれば是非もう一度挑戦したいものである」と結ばれていた。

そんなKさんは軟弱者を拒否し続けるヒマラヤではなく、「心のふるさと」のような奥多摩に逝ってしまった。

一合掌

H. 18. 5. 27

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名 (4)

JR古里駅北側に広がる小丹波 (こたば) 集落の
後背にある妻戸山 (ずまどやま) には、赤杭山 (赤
久奈山・あかぐなやま) を経て川苔山への尾根道が
続いています。むかし、ここの稜線には、サス (焼
き畑) や小丹波村共有のカヤト (茅を育てる場所)
がありました。

ここには、「一口刈り」という話が残っています。

昔からこの辺りでは、毎月17日の山の神の日には、
山へ入るなどいわれていました。間違えて17日に茅
刈りに入ると、その人は必ず消えていなくなるとい
われていました。その日は、必ず魔性のものが現れ
て、これに見つかったが最後、逃げても隠れても一
口に食われてしまうということでした。

一般的に17日は、山の神が一日狩をする日だとも、
狩をした矢を拾って歩く日だともいわれ、この日に
山仕事にいった、もし山の神に会ってもしたら、ど
んな災難が降りかかるか分からないと思われてきま
した。そんな訳で、山仕事をする人たちは、この日
は必ず休んで、お日待などして一日を過ごすのでし

た。

ある年の盆の17日にひとりの村人が、このカヤト
で茅刈りをしていると、「一口に食うぞう」と叫ぶ声
がしました。村人は気丈にも、「食えるものなら食っ
てみる」とばかりに茅を刈っていると突然、恐ろし
い姿をした怪物が現れたので、驚いた村人は、転が
るようにして家に逃げ帰りましたが、3日3晩うな
され通して、この世を去ったということです。

「妻戸」とは、「ずま (柴糺・しばぞり) を曳き下
ろす所」のことで、村人が木材などを曳き下ろす場
所でした。また、「ずまど」の「ど」は、奥多摩町内
で日常的に使われている「わさびど」「すまいど」「む
ぎまきど」などの「ど」と同じように、所、場所の
ことをいいます。

【資料】

奥多摩町誌



山の神

山の花だより

植物界のバラサイト

奥多摩では、厳冬期に咲く花はほとんどありませ
ん。今回は、冬の山歩きで見かける植物のうち、上
を向いて歩くと見つかるヤドリギ科のヤドリギと下
を向いて歩くと見つかる低木のツクバネを紹介しま
す。この二つの植物は半寄生植物で他の木に依存し
て生活しています。

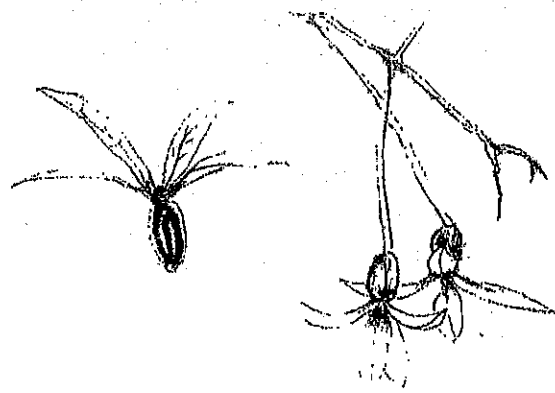
まずは、聞きなれない半寄生とは、なんぞや、と
思われる方もあろうかと思いますが、要するに植物
界のバラサイトです。

養分や水分を寄生根から吸収し光合成するかしな
いかが決め手です。ナンバンギセルやネナシカズラ
は、光合成しないので100パーセント寄生植物です。

一般的に寄生植物と言えば、寄生木と書くヤドリ
ギがよく知られていますが、植物学上、ヤドリギは
光合成するので半寄生植物です。ケヤキ、ブナ、ミ
ズナラなど、落葉樹の幹に取りついて水分や養分を
吸い取って花を咲かせ、実をならせます。ヤドリギ
の実は、野鳥のキレンジャクやヒレンジャクが食べ
て未消化の種は糞をすることにより速くに運ばれま
す。

一方、ツクバネは、モミヤアセビ、ツガなどが近
くにあれば、地中に根を張り、人の目にふれない地
下で寄生本能を発揮し、ちゃっかり養分をいただい
ているのです。しかし、ツクバネに言わせれば、あ
なたなしでは私、生きていけない的的な性 (さが)
を背負った植物で見方によれば、あなたの傍で一緒
に生きていきたいのという愛すべき植物なのかも知
れません。

ちなみに、奥多摩では、ヒイコノキと呼ばれてい
ます。ヒイコとは、羽根つきの羽根のことです。今
度、山道で出会ったらよーく観察してみてください。
かわいい実が印象的です。



ガイドだより ～わたしの一名山～

西武立川駅前に立つと、雪を被った富士山を始め丹沢山塊、奥多摩、秩父の山々の連なりが重なり合っ、大きな一つの山のように見えます。

その中でも一際目立っていて、特異な形をしているのが大岳山です。何処からでも、誰にでも、わかる山ですが、私にとっては、ある日から特別な山になりました。

ガイドの会に入ってからのある年の大晦日に、大岳山荘に寝泊まりをして、元旦登山をしました。ひとりで朝、家を出発して山荘まで歩いている間は、少し不安な気持ちもありました。登山者も少なく、御嶽神社ではお正月の準備をしていて、厳肅な気持ちになりました。山荘に着いたらその不安もどこへやら。15人ぐらいの宿泊者がいて、ストーブを囲み、雑談したりしていると、ひとり歩きのおばさん(私)は、すっかり、そこに馴染んでいました。

元旦に夫をひとりにして(実際は、お酒に付き合わされるよりも、私ひとりでもよいから山の空気に浸りたいという思いのために)後ろめたい気持ちもありましたが、その頃はもう夫の事など忘れていました。ゴメンナサイ。

日帰りで大岳山荘の脇を通り過ぎていただけの時は、なんとなく泊まる気がしない所という思いしかなかったのですが、百万ドルの夜景が寝ながら見えるのですから、大岳山荘泊バンザイでした。



明けて新しい年を迎えた訳ですが、テレビから「六段の調べ」など流れなくとも、真っ赤な初日を拝みながら、今年も健康で頑張ろうと思いました。

下りは、往路を戻る予定でしたが、迷った末に比較的楽な馬頭刈尾根を下ることにしました。それこそ真っ白な富士山を横に見ながらの下山は、前夜テント泊をして、人恋しくなっていた大学生がずっと一緒に歩いてくれたのが、心強かったです。

この素晴らしい初体験の感動は、駅から見る時も、我がマンションから見る時も、あの大岳山荘に泊まり、あの長い馬頭刈尾根をずっと富士山を横に見ながら歩いたんだなあ、いつでも鮮明に蘇り、幸せなワクワク感を覚えることができます。

大岳山は、いろいろな意味で、私にとって特別な山です。(N. N)

施設案内

◆ 山のふるさと村

秩父多摩甲斐国立公園内にある都民の水がめ、奥多摩湖畔にあります。村内には、水道局が管理する水道水源林があり、その豊かな自然環境の中で、リスやムササビをはじめ、多くの生き物が暮らしています。

暖房完備のケビンサイトが特別割引

平成19年2月28日まで

4人用1泊：10,000円が5,000円

8人用1泊：20,000円が10,000円

お申込み・お問合せ 0428-866-2324

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、冬から春に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- 3月23日(金) 海沢のカタクリと史跡探訪
応募締切日 3月6日(ハイキング)
- 4月3日(火) 数馬の切通しと海沢のカタクリ
応募締切日 3月18日(ハイキング)
- 4月11日(水) むかし道に春の植物を訪ねる
応募締切日 3月18日(ハイキング)

募集人員：各回30名、参加費：500円

* その他(どなたでも参加できます。)

4月13日(金) 山開き前夜祭 氷川キャンプ場
(会費：1,000円)

4月14日(土) 山開き式 奥多摩駅前

《 編集後記 》

本号でようやく1年が過ぎました。今後も奥多摩からの情報を発信し続けます。

次号は、平成19年4月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会